「近づいてくださる神」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　マタイによる福音書１４章２２－３３節

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　森島　牧人　牧師

　今日は３本目の蠟燭に火が灯されました。来週には４本目の蠟燭が灯されてクリスマスの礼拝の日となります。４本の蠟燭をアドベントに灯すのは教会の歴史の中で始まりましたが、いつの頃からか１本目は希望の、２本目は平和の、３本目は喜びの、４本目は愛の蠟燭と呼ばれるようになりました。今日は「喜びの蠟燭」に火が灯されたということになります。

　前回学びましたように、アドベントはラテン語の“adventus”で、「到来」、「到着」を意味しています。神の独り子が、汚濁にまみれる私たちの闇の世界に真の光として来られる、しかも罪人である私たち人間を神の子とするために、私たちと同じ人間になって地上に降りて来られる。その出来事を待ち望む時がアドベント（待降節）の意味するところです。

　今日の聖書は、嵐の湖の舟上で、どうすることも出来なくなった弟子たちに、主イエスが近づいて来られるという出来事で、まさにアドベントと同じ出来事と言えます。激しい嵐に襲われた小舟のように、私たちが人生の中でどうしていいのか分からなくなった時、そんな私たちを見つけて、神の子としての力を持って近づいて来られ、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」（マタイ１４：２７）と言われる主。そのようなお方が、私たちの世界に来られて共に生きてくださる、それがクリスマスの出来事です。

　今日の聖書箇所は、「五つのパンと二匹の魚」として有名な奇跡物語の直後の場面で、聖書には「それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、その間に群衆を解散させられた。群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。」（同１４：２２－２３）と書かれています。主が山に登られたのは、休息のためではありません。主がひたすら語り聞かせて来た神の国のことよりも、パンを食べることの方を喜びとして、主を褒めたたえる群衆、そして群衆にもてはやされて有頂天になっている弟子たちの弱さを覚え、祈るためだったのです。

　一方、弟子たちは嵐に押し戻されて前進出来なくなった舟にいました。私も訪ねたことがありますが、ガリラヤ湖は周りを小高い山に囲まれた湖です。このような湖に吹く風はとても複雑で、天候も急変するのです。しかし、それでも自分たちの力を恃みとするしかないと考えた弟子たちは、必死で闘いに挑んでいました。ところが、ここで彼らの思いもしなかったことが起こります。祈りを終えられた主が、山を降り、彼らのところへ行こうと湖に踏み出されたからです。水の上を歩くというのは＜奇跡＞です。主は、奇跡を起こしてでも彼らの所へ行こうとされたのです。

　つまり、この物語を通して聖書が伝えたい点は、＜私たちの主であるキリストは、私たちを救うために、奇跡さえも起こされる方である＞ということです。来週迎える「クリスマス」も、これと全く同じ出来事です。神が人となって地上に来てくださる・・・まさに奇跡です。死ぬはずの私たちを救うため十字架上で死ぬことを使命として地上に降ってくださったのです。

主の生誕の場所が、家畜小屋であるのも偶然ではありません。家畜は乳を、労力を、最後には自らの肉を人間にささげます。十字架で血を流し、肉を裂かれて、私たちに全てをささげられた主イエスの生誕の場所は、家畜小屋以外にはあり得ないと思われるのです。そこまでして、私たちの所へ来てくださる主。そのことについてパウロは、「・・・死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ロマ８：３８－３９）と書いています。そのことを覚えつつ、今年のクリスマスは、お迎えしたいと思います。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（説教要約　羽入田悦子）